

# みんなのスペース

◆あて先・問い合わせ  
〒028-1392 (住所不要) 山田町役場総務課情報係(☎82-3111内線417)へどうぞ。

## やまだ文芸広場

- ・何気ない言葉のようごあたたかい
- ・本音とも思う冗談話してる
- ・目立たない人の意見に値うちあり

芳賀 誠一(豊間根・72)

- ・団子より花見の酒は桜顔
- ・割烹着天ぶら鍋で大火傷
- ・お小使い八億もらって熊手買い

佐藤 兼男(荒川・87)

朝ごとに飯と魚に水そえて

猫の靈にと神に願ひつ

昆 ユリ(織笠・81)

世の中は今日より外はなかりけり

人の世の昨日と今日のへだたりを

この世にて知る我がさだめかも

内館 洋一(飯岡・?)

## イラストコーナー



雨藤 (飯岡・18)



蓮哉 (船越・18)



アビエもん (船越・14)



ぴよきち (船越・8)

## 投稿写真



みかん (豊間根・12)



「澁磯海岸に行ってきました」  
山の内弁当 (船越・?)

写真も  
お待ちしております



## 町長室から

4月9日、ことし最後の町長出席の入学式が、山田南小学校で挙行されました。すべての学校に行きたいのですが、日にちが重なりますので順番に出席しています▼私の隣に佐々木教育長がいましたので私が小学校の入学式のことを覚えていますか? と聞いたら「よく覚えています」ということでした。実は私もよく覚えていて、父に手を引かれ登校したことが記憶にあります。当時の山田小学校には二宮金次郎の銅像があり、父にどんな人が説明されたことも覚えています。この子どもたちもこの日をいつか思い出す日が来るのだろかなと思えました▼式が終わりステージに2年生が登場し、お兄さんお姉さんとして1年間の成長ぶりを発表しました。この子どもたちのためにも、町として多くの難問を解決し復興計画をしっかりと進めなくては、と気持ちを新たにした入学式でした。新1年生に感謝。

山田町長 佐藤 信逸



福の春の息吹  
福祉施設再建

春の息吹を感じ：

山田の商店街の再建

海に福幸：春

息吹を感じ：

佐藤 啓子（船越・36）

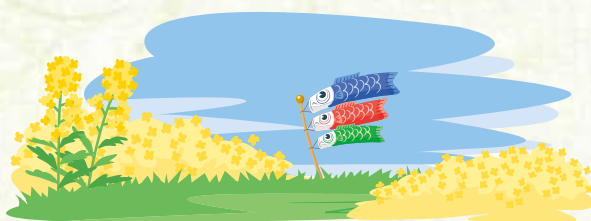
風で折れた桜の枝を拾い、  
かびんにさして部屋においたら  
暖かいのか、花が咲き  
ひとあし早い桜をながめて  
楽しんでます

佐藤 サツ子（織笠・74）



### 忘れるな3・11

災害は忘れた頃にやってくる、先人達は言っている。今から三年前、千年に一度とも言われるような大地震で明治、昭和の津波を超える大津波に見まわれ、大被害の「ガレキ」の町となり、高台にあった船越小学校もその例外ではなかった。船越小学校の児童たちは、先生方の的確な判断と誘導で、全員無事に避難ができ、県立青少年の家があったおかげで不自由ながらも、なんとか勉強をする事ができ、石の上にも三年という、たとえばあるようにずーっと我慢を重ね、ようやく新校舎の落成に、喜びと感動でいっぱいであろうと



思っているのは、私一人ではないでしょう。

津波に襲われた後、新聞紙上に、津波はてんでんこという文字が目を引き、一人一人が助かるためには、日頃から、災害時にはどこへ避難するかを話し合っておく必要があると思います。けれども、復旧、復興を前に進めるためには、避難時とは違う協力が大事な事だろうと思います。

老若男女、向う三軒両隣、日常生活の中で培って行かなければと思うし、自己中心ではなく共存共栄、地域ぐるみであってほしいものです。

ボランティアの皆さま、消防団員、警察官そして自衛隊の皆さま、本当にご苦労さまでした。ありがとうございます。

西館 隆船越・81

### 出会いとお別れ

広報4月1日号の佐々木安男様の遺稿が、清水野牧子様の代投稿で失せることなく掲載されましたこと、お察し、読みながら在りし日、気さくにお話できた事を思いうかべております。人づてに訃報を聞き、夫と2人で「元氣だったのに…」と信じられませんでした。知り合ったのは、震災後、共

生会様の送迎車で宮古方面の病院行きの相乗りでした。また、縁あって「かろ」の、デイサービスでも一緒でした。帰宅すると佐々木さんが、きょうも絵を上手に描いていたよ、と褒めておりました。広報にも投稿、感性のある方でした。出会いの喜びが束の間、知人がいなくなるということは、思い出が、また、一つ失せていくような気がしてなりません。

早い旅立ちで無念でしょうが、浄土で永久にお休みくださいませ。

合掌

菊地 サカ子（織笠・79）

### じょうか

若布の全盛時代の時であった。その年は、若布の生育も素晴らしく順調で大漁だった。だが今まで、経験そして記憶にもなかったことが起こった。それは、若布と若布の間に、「じょうか」の発生が随所に見られて、随分と話題にもなった。今となればその原因については、きちんと説明をするべく、知識についてはみんなが覚えている。

この「じょうか」を、誰も食に用いようとしなかったが、宮古方面ではずっと昔から、食として愛好していた。ただ若布や

昆布のように、食感をそそるような芳香がある訳でないが、ポイルした時の色彩が若布や昆布より鮮かにうつり、いかにも旨そうに見えるが、食べてみると全然なんの味もない。だが「じょうか」独特の、シャキシャキの食感に、宮古人の言うにはこの「シャキシャキ」の人氣が高いとの事であった。人氣にほだされ、何度も口に入れたが、今一である。塩蔵している

「じょうか」と若布を、何年の間、前沢の泉友（温泉友）の所へ届けた。「じょうか」の色合と、あの美しいスタイルは、本場に「美人」である。早速、泉友より連絡があり、「若布・昆布、ありがたいもんだ。持つべくものは良き友よ」との誉めに続いて「若布は分るが、なんで昆布に美しく孔が空いてる。どうしてなにして空けるのか、また、どんな道具で空けるのか？ なんてこんな立派に空けるのか」とのことだった。この「じょうか」によって宮古水産高校が文部科学大臣奨励賞、そして、水産長官の受賞に輝き、漁連情報、岩手日報に二度にわたりて大きく掲載された！

我が国の新しい食文化、「アカモク」。そしてこの「じょうか」、世界に誇れる岩手から！

山崎 卓三（大浦・？）